寝台

（白い寝台に横たわる肉体）

もう自己を保持し続ける必要はない
生かされている、ということ
お節介に溢れかえった社会
孤独であることの難しさ
あるいは歪められた孤独というもの

（ぎりぎりときしむ骨組み）

現実というものは意味を持たない
仮想世界はそれを声高に叫ぶ
どちらにせよ
水死体のような言葉が
ただ羅列されている

（青く塗られた天空）

現在という場所———そこに在るものを現実と定義し
それを疑う者だけが得られる特権
そこから少しだけずれてなお
現実を認識することができるということ
それを一笑に付す者たちの集う街

（漂白された雨が通り過ぎる）

現在という時間が浮動点であるのか
それとも、ただ我らが
そこに繋がれた奴隷であるだけなのか

次第に増してゆく、そのズレに蝕まれ
狂う、と呼ばれるようになる

（強い日射しが水滴を熱する）

あたかもウィルスが拡散してゆくが如く
辱められた細胞の群れが増殖してゆく
２＋３、そして３＋２
乱れた律動の中で喘ぐ無意識の欲望
置き去りにされた本能への惨めな未練

（静かに眠りに落ちてゆく）

私の掌
私自身の掌

（森に分け入る夢）

(2012.9.2)